

VII 和草派の方式登場

1. はじめに

漢字、片仮名、平仮名、ローマ字 4 種類の文字を使い分ける日本語において、正円幾何派、ラテン文字の草書派が成立する流れにあって、仮名文字の筆記運動を反映した速記に着目する流れが始まる。その初期に、泉式があった。また、伊東稔による伊東式ひらがな速記法では左起右進横書きながら、日本の平仮名の書法の特徴を取り入れようとした。さらには、平仮名と片仮名を素材にして表音符号を綴る方式が三村侑弘によって縦書き速記として登場し、さまざまな広がりを見せた。

2. 幾何派の動態符号研究から日本語筆記体符号への視点へ

グレッグ系日本語新方式は定着しなかったが、そのかわりグレッグ式の書きやすさは速記符号の動態理論のテーマとして幾何派に大きな示唆を与えた。

歴史的に見ると、速記符号研究者にとり、1 つの速記符号にどれだけの音列を載せるかが、高速化のカギであった。

中国では速記符号研究の課題を「三易」という言葉で説明する。それは易学、易書、易認で、学びやすく、書きやすく、読みやすいものであるべきだとする。

手書き速記符号の種類を文字式、符号式に大別して、後者をさらに幾何派、草書派、半草書派に分類できるが、符号式の 3 流派(図 2-119)はどのような特徴や課題があるのだろうか。

- 1) 幾何派は、見た目の簡単さを追求することを高速度理論研究の課題とする、
- 2) 草書派は文字と同じような機能と書きやすさをラテン文字の筆記運動から追求し、
- 3) 半草書派もラテン文字の筆記運動に基づいて、書きやすく、学びやすさを追求する、

草書派は、単位符号当たりの音声負荷性能が、幾何派に劣ると言われる。

しかし、実務上で、他者の幾何派の速記原本を見ると、規範通りに書いているようだが、符号が読めない場合が起こり得る。

速記者の技能レベルに関係するが、速記符号が読めないという現象は外国語、外来語、未知語、初出語等がきっかけになって生じることが多い。漢字のような「単語優位効果がなさそう」な環境が関係しているようであるが、符号が読めなくなる理由としては音だけをとらえる速記符号には文字が持つ働きの何かが不足していることが考えられる。この点が速記符号による文通や速記符号の第三者反訳の場合に問題を生じる可能性がある。もし、主に全音記法をとる草書派においてこの欠陥の程度を少なくする要素が存在するとすれば、幾何派のコーディング(符号化)・デコーディング(解読)のメカニズムに隠されている

幾何派 Geometric	
草書派 Cursive	
半草書派 Half-cursive	

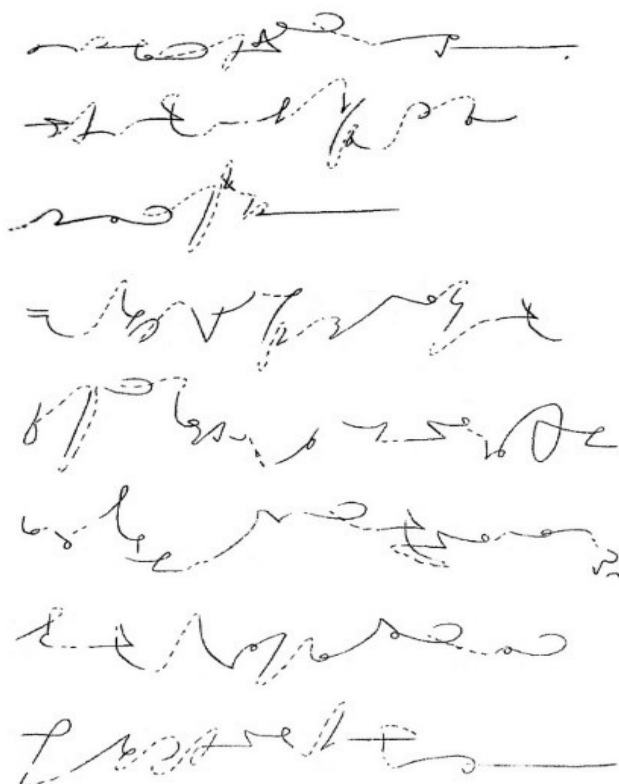
図 2-119 幾何派、草書派における符号の多様性

解決されるべき要因が見つかる可能性がある。

一方、認知心理学では情報の認識について「作動記憶容量のゆとり」と、その知的処理上で実行される言語課題と思考課題の仕事率が重要だとする。一方、速記符号の認知と解釈、また話線、話題の理解の面で知識や処理メモリの余裕が十分でない場合、速記符号が期待通りに読めなくなることが考えられる。

それは、朝日新聞大阪本社の「電話の読み方・送りかた」教本の「はじめ」にある「記者のかんどころが打てば響くようにピンと来る」点、「速記をしながら意味が頭に入らないと翻訳できない」とする点が、文字による意思疎通の不成立の要因の一つであり、解明すべき課題である。

早稲田式において「搬送線原理」(例は図 2-120)を執筆した寺井美巳は、速記上達のこつは、運筆、文法、心の置きどころとする。読む技術においては、単語から思想を汲み取る力が必要であるとした上で、見える線と、見えない搬送線の重要性を説く。参議院式の畑田明は「音に即して書き取っていくというのではなく、言葉に即して書き取っていくように符号観を変える必要があるように思うのである」と書いている。



まず、核兵器の実験停止の問題ですが、現在ただいま、原水爆禁止と軍備とは最も大きな国際問題の一つになっておるのであります。日本は広島、長崎、ビキニと三度にわたる原水爆ただ一つの被災国であり、しかもなお、現に太平洋上における米、英、シベリアにおけるソ連の原水爆実験に悩まされている。私どもは、原水爆保有国たる米ソ英のいずれの国たるを問わず、その実験に断固反対するものであります。

図 2-120 実線の速記符号と送りの搬送線の関係

衆議院式の西来路は、速記符号には、テキストに示される規範の静態符号と、現実に書

かれた動態符号があると述べている。静態符号の動態変化はいつも同じ結果を生じるものでなく、速記者個人にとっても常に同じ変化を生じることはない。筆跡の変化を生じる大きな要因は、話の速度と話の内容があり、聞き取りやすい話し方をしているか、環境騒音がないか、話し手の近くで肉声を十分に聞けるかなどが関わる。

幾何派方式において速記符号について静態と動態のずれを重視しなかったことは、教えられた速記符号の形と現実に綴った速記符号のズレの課題解決を書き手に委ねてきたとも言える。

一方、普通文字は書き手によって、さまざまな筆跡が生まれ、速記の単画符号を書き崩しかねない。そこで、方式の創案者、教育者が動態符号を定義づけて、その筆跡を一定の崩れの範囲内で書けるように規範化する研究が幾何派の中で行われてきた。

速記用紙上に三次元で移動する筆先の動きがつくる「点」がつながって実線の速記符号、あるいは見えない搬送線となる。現実には、その移動の結果がペンや鉛筆で二次元の符号群として速記用紙の上に固定される。淡線は主にX軸、Y軸の軌跡であり、濃線はZ軸の力が軌跡に加わってできたものである。したがって速記線と搬送線を全体として考えなければ、書きやすく、読みやすい模範的な速記符号を理解できない。筆先の移動は加速度要素を持ち、実線と搬送線を生む点の移動について動的に観察して速記符号の組み合わせごとに運筆法を研究することが手書き速記において重要となる。

日本人の文字書き運動の性質は、漢字、平仮名、片仮名、ローマ字、数字ごとに、また縦書き、横書きにおける続け書き、分かち書き、書字材料と筆づかいの違い、用い方によってそれぞれ異なる。

例えば幾何派の田鎖式では、字を書く手を浮かせる形で自由度を確保しながら速記符号を書いたり(懸腕)、鉛筆では小指の先やこぶしの下部分を用紙に触れるような持ち方(提腕)で符号を書いたが、左手を平らに机の上に伏せ、筆を執る右手をその上に載せて文字を書く枕腕は行われなかった。

そうして、直線、曲線ともに接続関係によっては書き崩れる点において、それらに伴う変化があり、次第に合理的な線の連続関係がわかって規範化されてきた。書道では、懸腕は運筆の自由度が高く大字を書くのに適するとみるが、速記では違ったねらいで正円楕円幾何派の山根式において懸腕が採用されている。すなわち、山根式においては基本的に書き癖が否定され、定規やコンパスで書くような楕円符号、正円符号、直線を要求することになっているので、幾何図形を実現するために、肩を支点とする懸腕が選ばれていた。

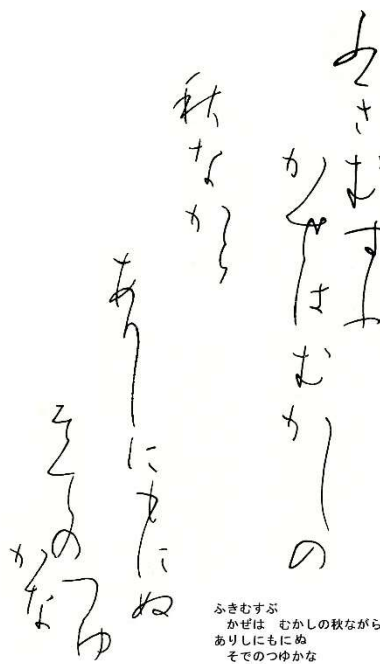


図2-121 平仮名の続け書きの動き
「たちまちうまくなる字の本」1979 小林龍峰 p149
新古今和歌集 小野小町

3. 泉式全音記法

武部良明は「国語速記史大要」(下)に「昭和十五(1940)年、乙部泉三郎は泉式を発表し、長野において泉式速記講習会を開くとともに翌十六(1941)年『ひらがな速記術』及び『ひらがな速記術独習』を著した。乙部はグレッグ式がピットマン式にドイツ系斜線派を取り入れて楯田派をつくったのにヒントを得、同じような立場をひらがなの書記運動に求めた」と書いた。

	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
泉式 1969	○ ㇿ ㇾ ㇽ ㇼ	ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ	ㇷ ㇸ ㇹ ㇺ ㇻ
図2-122	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
	ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ	ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ	ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ
泉式全音速記法 1969 基礎符号 乙部泉三郎	マ ミ ム メ モ	ヤ ユ ヨ	ラ リ ル レ ロ
	ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ	ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ	ㇰ ㇱ ㇲ ㇳ ㇴ

乙部は、「私が平仮名の分解線を以て、その基本父字に採用したのは、平仮名の運筆が極めて流暢であり、吾々の手に書き馴れていると云う所に着眼した為である」(「ひらがな速記術独習」と、ひらがな速記法に着目した理由を述べている。それではひらがなの書記運動とは何か。武部良明は「それは結局回転運動に外ならない」(「日本速記方式発達史」と述べている。

1940年、折衷派「泉式ひらがな速記術」を刊行した中で、乙部は「それは西欧の速記符号は幾何派、草書派いずれもラテン文字筆記体のペンづかいの癖をベースにして符号形、連続を考えたが、日本語では平仮名の続け書きこそが手になじんだものであるから、基礎符号の設計は平仮名書きの特徴を取り入れて行うべきだ」という考えであった。方式名に「ひらがな」と書かれていることは誤解を生むが、泉式は熊崎式系統の符号体系を用いている。図2-122の基礎符号は、連続上の関係で音によっては2種類の符号を用意し、書きやすさを追求している。

一般に、日本語では古くは濁音を好まず、清濁音の識別が連濁の場合などで正しく行えることがあって、多くの速記研究者は実務経験的に、濁音は必要な語にだけ示して、そのほかは一応の区別法はあるものの、清音と同じ符号を用いてきた。実際に要注意語以外は清濁の区別を行わない速記者が多い。しかし、乙部は清音と濁音符号を図2-123のように、別々に設定した。「泉式全音速記」では、基礎符号は「放火」、「防火」、「忘我」、「邦画」の異音を忠実に発音どおりに書き取るものであったが、同音語は対象とされなかった。また、助詞は「母は東京へ行く」を「母わ東京え行く」と筆記され、日本語の正書法とずれがあった。

日本語は漢字と仮名を主に用いて書かれるが、漢字が永の字八法の筆画で書かれるのに対して、仮名文字の平仮名は筆運びで独自の続け書きが発達し、書き方が片仮名の場合と同じでない。

泉式の厳格な表音思想の例

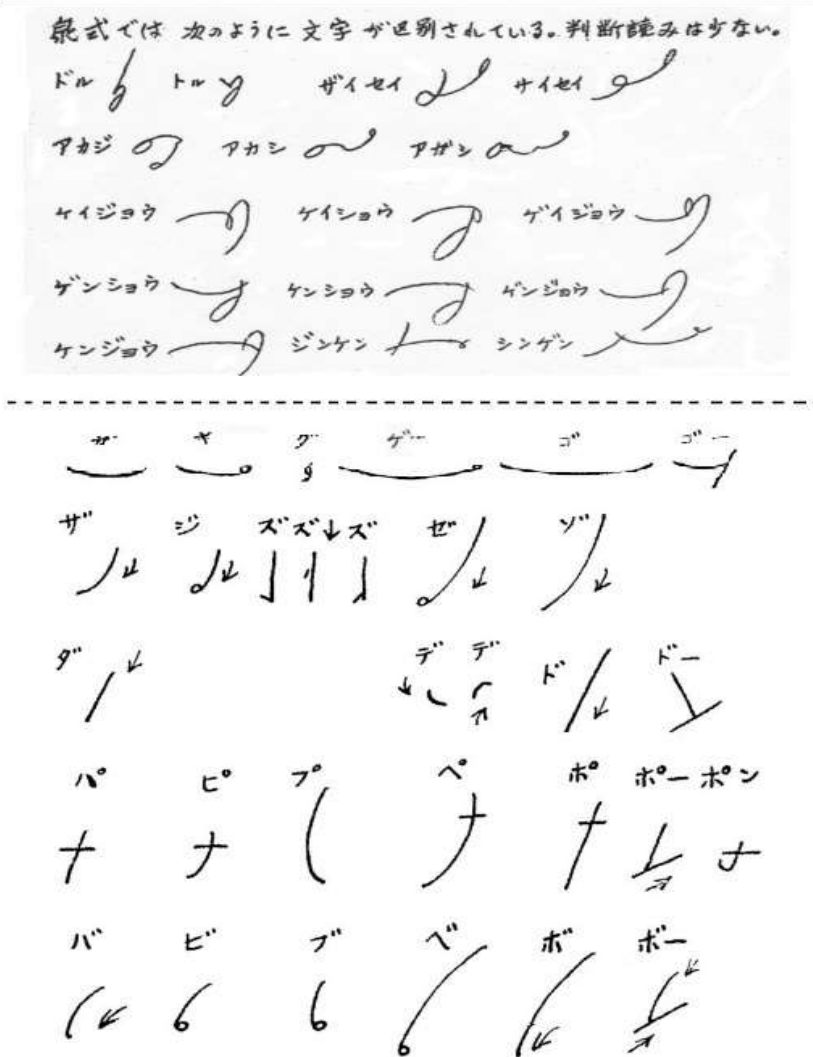


図 2-123 泉式全音速記法 濁音, 半濁音符号表

泉式は基礎符号体系を熊崎式ベースの個性的な編成とした。ア列の符号は長さを中型とし、二倍にするとオ列の符号になり、ア列の 1/3 形は小型として母音などに用いられた。基礎符号の規則性としてア列×2＝オ列、ア列+小円（順記）＝イ列、イ列×2＝エ列と全く熊崎式に則る、としている。

その場合、カ行、ナ行、ハ行、マ行、ラ行は独自の図形を選択し、清音、濁音、半濁音との整合性を持たせる方針をとった。カ行を見ると、/カ/は凸型の水平曲線を採用し、末尾に小円をつけると/キ/とし、/カ/を二倍にすると/コ/、/コ/に小円をつけると/ケ/とした。濁音（ガ

行) は凹型水平曲線を用いて同様の構成をとった。単画符号はア列, オ列とし, 全体としては折衷派としたが, サイン符号以外に交差型符号(ハ行), 枝出し型符号(ズ: \downarrow) などをつくり, 離筆で不利とされる符号を積極的に用いて分ち書きとした。撥音, 促音, 畳音などにも独自の符号観に基づいた形式を採用したことが特徴であった。

日本語の音韻を間引かず, 必要なレベルで全部を書きとめる全音記法によったことから「全音速記」と命名された。ただ, 書字方向は左起右進横書きを継承し, 仮名文字が続け書きの妙を実現する縦書きではなかった。

このようなストローク符号の設計のほか, サイン符号の工夫を行い, 小円の省略法, キ字簡略法といった独自の書記法を考案した。

しかし, 高速度型速記法が備えた基礎符号, 縮記法, 略記法, 省記法, 略語辞書という体系をとらないで, 文法に基づく品詞の扱いとして助詞 14, 助動詞 19, 口語体の言い回しなどを簡単に筆記する便法を整えており, 略語についても 28 種 (36 変化) にとどめて, 日本語を学習性のよい方式としてつくり上げた。

図 2-124 の文例を見ると, ドイツ草書派, グレグ式が避けた垂直線が使用されており, この点で日本語の書字文化を踏まえていることがわかる。この鳥取速記士会が実施した標準文例による符号は基礎符号の複雑さと別に, 画線の連続性に配慮した速記理論によって書きやすい線を実現している。

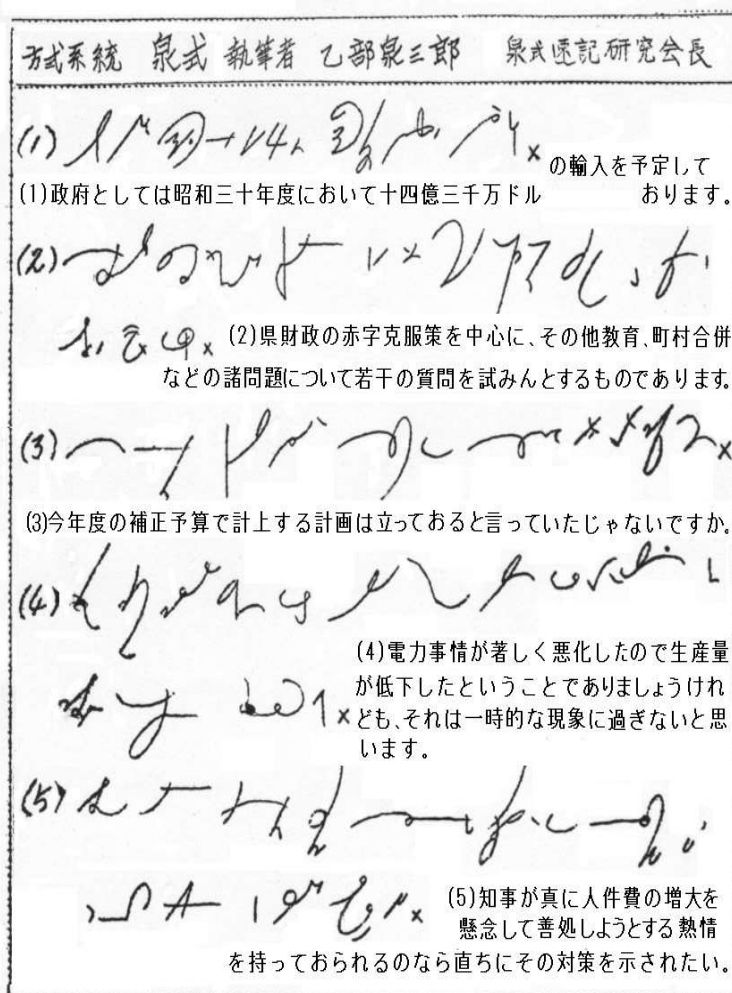


図 2-124 泉式全音速記法による文例 乙部泉三郎

4. 伊東式ひらがな速記

1952 年以降、福島県白河市議会、逗子市議会の速記に従事した根田良子は、1951 年から 2 年間伊東稔に個人的に伊東式ひらがな速記を学んだ。「速記符号文例集」報告書、268P) 伊東は初め個人的に自案を教え、通信教育に乗り出すとともに、横浜山手英学院邦文速記科においても創案した「ひらがな速記」の指導を始めていた。時期によって伊東式の基礎符号に異なるものがあるが、基本的にあまり基礎符号を変更していなくて、図 2-125 は根田良子が習った 1951 年ごろの基礎符号である。

伊東ひらがな式	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト
平仮名の部分形	あいうえお	かきくけこ	さしすせそ	たちつてと
一画符号	㇀(イ) ㇁(ウ) ㇂(エ) ㇃(オ)	㇄(カ) ㇅(キ) ㇆(ク) ㇇(ケ) ㇈(コ)	㇉(サ) ㇊(シ) ㇋(ス) ㇌(セ) ㇍(ソ)	㇎(タ) ㇏(チ) ㇐(ツ) ㇑(テ) ㇒(ト)
ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロワ
㇓(ナ) ㇔(ニ) ㇕(ヌ) ㇖(ネ) ㇗(ノ)	㇘(ハ) ㇙(ヒ) ㇚(フ) ㇛(ヘ) ㇜(ホ)	㇝(マ) ㇞(ミ) ㇟(ム) ㇠(メ) ㇡(モ)	㇢(ヤ) ㇣(ユ) ㇤(ヨ)	㇥(ラ) ㇦(リ) ㇧(ル) ㇨(レ) ㇩(ロ) ㇪(ワ)
㇫(一) ㇬(二) ㇭(三) ㇮(四) ㇯(五)	ㇰ(六) ㇱ(七) ㇲ(八) ㇳ(九) ㇴ(十)	ㇵ(一) ㇶ(二) ㇷ(三) ㇸ(四) ㇹ(五)	ㇺ(一) ㇻ(二) ㇼ(三) ㇽ(四) ㇾ(五)	ㇿ(一) ㇽ(二) ㇾ(三) ㇿ(四) ㇽ(五)

図2-125 伊東式ひらがな速記の基礎符号 1951年ごろ 根田良子によるもの
ひらがなの部分を取り出す原理と単画化した基礎符号を示している。兼子次生整理

伊東は「ひらがな速記法は、ひらがな文字をさらに省画化して構成された新しい速記法です」とし、「初歩から親しみ易い字体になっているばかりでなく、その省略法にしても、ひらがな文字の特徴を生かしていくというやり方で、これを理論的に体系づけてあります」と書いている。

基礎符号は総数で 73 を設定し、その内訳は清音 44、拗音 21、半濁音 5、半濁拗音 3 とした。基礎符号には頭部にサインのつくものがなく、山根式に見られる楕円の一部を取り出した曲線符号を取り入れ、横書きする原則をとった。

連綴原則を見ると、主則として続け書きするものでは 23 ([え], [く], [し], [す], [つ], [に], [ぬ], [は], [ひ], [ふ], [へ], [ほ], [も], [け], [ま], [め], [そ], [て], [ろ], [の], [ゆ], [か], [る]), ただし 3 符号 ([け], [ま], [め]) は交差するときもあるほか、準則として 14 符号 ([あ], [お], [き], [さ], [せ], [た], [ち], [な], [み], [む], [や], [ね], [れ], [わ]) は交差することとし、また離して書く符号として 7 ([い], [う], [こ], [と], [よ], [ら], [り]) を挙げた。

そのほかの表音原則として(1)促音は前字の字尾の右側に加点し、撥音は字尾を右斜め上に撥ねて書く規則、(2)濁音は符号の上側、または左側に加点、(3)長音は横線を続け、(4)長濁音には上側に加点する規則、(5)同音が続く重音(疊音)は下側、または右側に加点、(6)三重音には横に線を引く規則を採用した。さらに(7)数字の書き方を決め、(8)略字として助詞、動詞で出現頻度が多いものを挙げた。

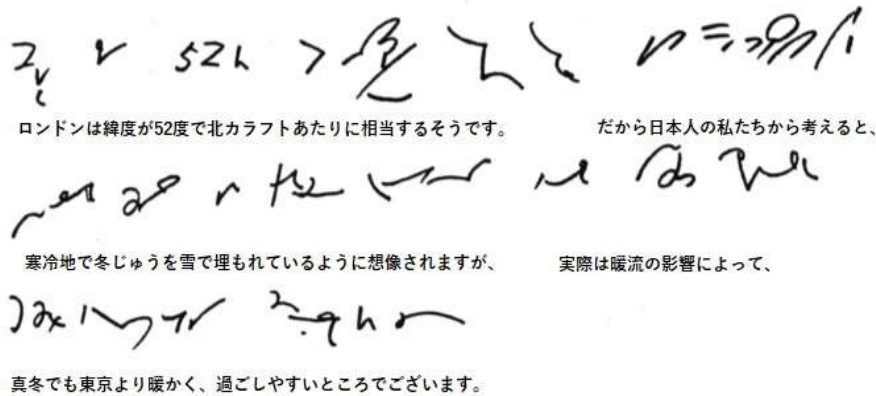


図 2-126 伊東式ひらがな速記の文例

図 2-126 は、根田が伊東稔から指導された符号文例である。

5. 三村式タテ書き仮名速記法

1964年9月28日、三村侑弘（旧名島比古）は平仮名と片仮名の筆づかいをまじえて縦書きする仮名方式「タテ書き速記」を東京・東栄堂から出版した。乙部が平仮名文字の運動を横書きで設計したのに対して、三村はタテ書き速記とし、かつ左から右へ縦書きで行が進む左起右進とした。図 2-126 の文例、回文として有名な和歌（「長き夜の遠の睡（眠）りの皆目醒め波乗り船の音の良きかな」）を見ると、速度面を別として、日本文字らしさを感じる筆記運動によって速記符号が綴られている。

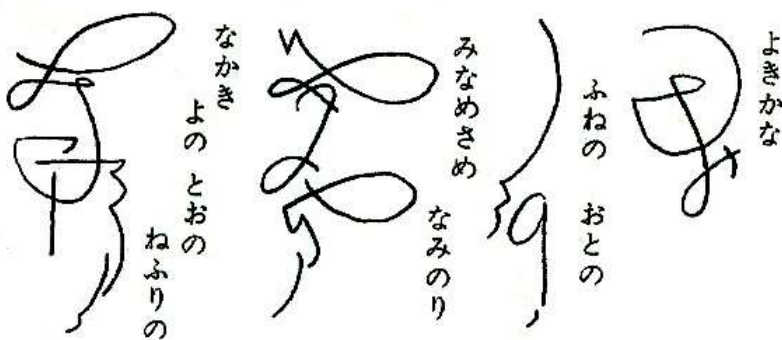


図 2-127 カナ, かなを統合した三村式の文例

日本語文字の書字特性は、ペン、用紙の書字材料によって違いが生じる。また漢字、平仮名、片仮名ごとに、縦書き、横書きにおける続け書き、分ち書きの筆記体がそれぞれ異なっている。漢字文化圏の中でも中国の筆の持ち方、姿勢、筆使いと日本のそれとは同じではな

い。西欧文明の速記が日本語へ移植される過程で、書字用具はインクとペンではなく鉛筆

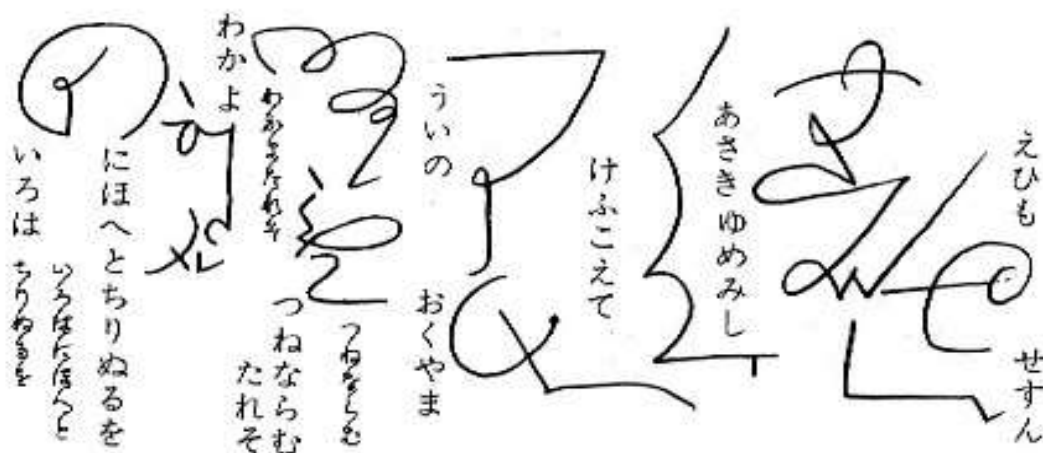


図 2-128 三村式のいろは歌文例 三村侑弘

を結果的に採用したが、それは経済性があり、ピットマン系の幾何派符号を筆記する際にうまく適応できたからだ。もっとも、万年筆を用いた中根式の中根正雄、森卓明、植田裕らは、ピットマン式の符号を再現する上で都合がよかった。しかし、複画派から折衷派へ改良方式が進み、単画派、半草書派へ多様化する環境下で、動態符号は変化を遂げながら、日本人の手に合った形態へと変わっていった。

三村は、1936年に都新聞（東京新聞）に入社したのち、旧田鎖式の安田勝蔵が同盟通信社で指導した同盟講習所式を受講したが、飽き足らず毛利式、中根式から理論を採り入れてタテ書き速記を完成した。創案のねらいを兼子への書簡に次のように書いている。「私は横書きが速いという『迷信』を打破したいと思い、タテ書きでも、他人様に負けないだけの速度が出るということを示してみたく、そして事実タテ書き速記で、昭和 16(1941)年以来昭和 38(1963)年まで、速記をたのまれれば書いてまいりました」、続けて「タテ書きの長所は（手前ミソです）そのまま読めるということ。別にホンヤクしないでも、結構それだけで読めることです。日本人のタテ読みの習慣が役立っているせいでしょうか」と読みやすさを挙げている。

田鎖式以来、速記者の間で文字式は速度が出ないとして評価が低かったが、三村は「速度の点ですが、速記界では十分間三千三百字を目標にしていますけれど、どうせ人の言葉はそのままでは文章にならず、速記の試験には、文章朗読をもって採点しています。しかし実際の話言葉（日常語）では、『えー』とか、『まあ』とか、『なんと申しますか』などという余計な連結音乃至連結語が数多く入り、そのまま書いたら文章としてチンプンカンブン。してみると三千三百字しゃべっているような文章が書けたから速記の達人とはいえません。そこにおのずと『修文』や『構文』がなされ、しかもその人がしゃべっているような文章が書けなければ、ホンモノの速記といえないと存じます。」と吐露して文芸、座談、講演など出版分野での速記利用に向けた方式として推奨していた。

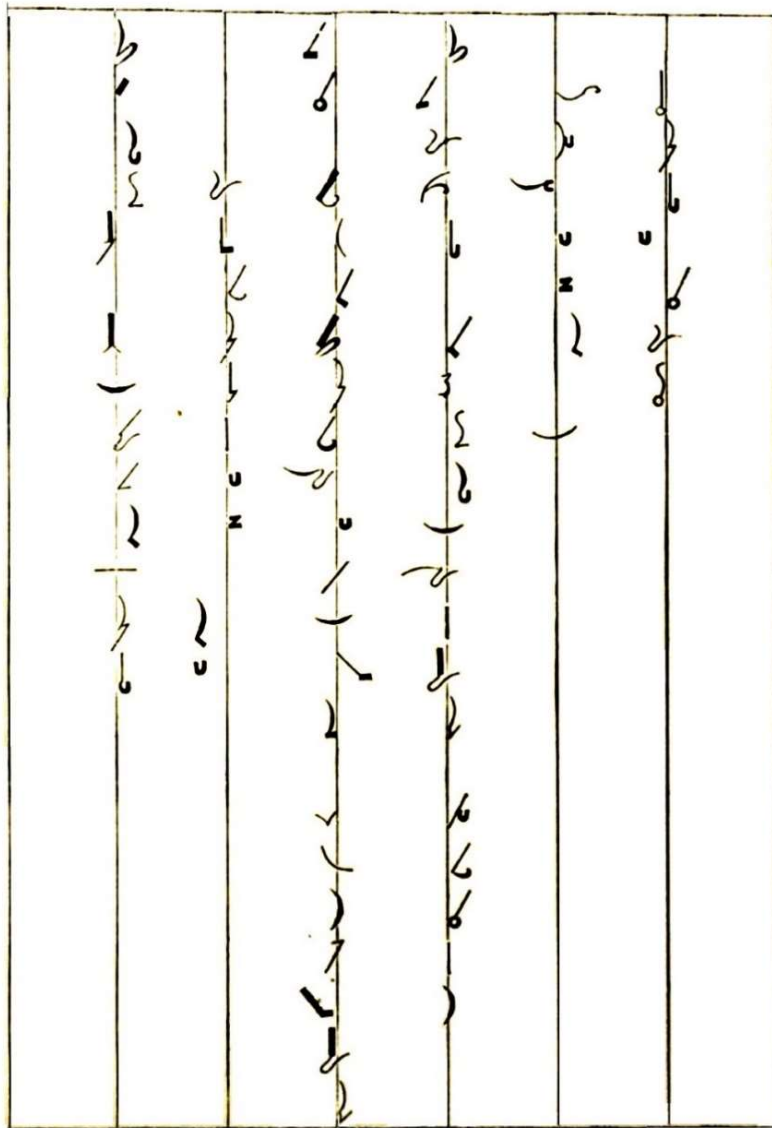


図 1-129 傳音快字の縦書き文例 蔡錫勇 1896

実際、文字を速記符号の素材に用いる場合、日本語では漢字は画数が多く、早書きに適していないので、片仮名と平仮名が素材として可能性がある。その場合、部分を切り取って符号の要素とするか、それらの書法の特徴を取り入れて、速く書ける速記理論を構築する道がとられた。片仮名は横書きに適し、見た目がシンプルで、分ち書きが可能であり、幾何派の速記符号のイメージに準ずる傾向にある。一方、平仮名は縦書きで続け書きする傾向があり、その書字運動は、なめらかな筆跡で、緩速があり、幾何派の速記符号のイメージに準じた傾向

がある。こうして豊かな筆先の変化を速記に取り入れたカナ速記が戦後ようやく公開された。

その中でユニークな方式は、平仮名、片仮名の動きを活かした三村式タテ書き仮名速記法であった。この方式では片仮名、平仮名をそのまま使用するのでなく、部分を用いている。

図 2-128 はカタカナとひらがなを巧みに用いるタテ書き速記で書いたいろは歌である。

かつて折衷派の牧は、速記原本の反訳を左起右進縦書きとする提案を行ったが、三村はその書字方向を速記符号の筆記に取り入れたことになる。

タテ書き速記における線條は、日本人が好む円運動の縦流れを取り入れ、交差、平行など、仮名文字の筆法を活かしているのが特徴である点で、日本的な草書つまり和草派と言える。

もっとも、縦書き速記は、のちに中国語初の速記となる蔡錫勇の「傳音快字」1896 におい

て、右起左進縦書きを採用されていた。それは中国語の筆記習慣を前提としたものであった。図 2-129 の傳音快字の文例である。

前野貴子によると、「傳音快字」は、縦書きの罫線紙に、行は右から左へ進む。速記符号を書く位置で四声（去声、入声、上平、下平）を表す。去声は中心線の左寄り、入声（現代中国語にないアクセント）は右寄りに符号を置き、上平（一声）の場合、声と韻は続けて書く、下平（二声）の場合、声と韻は分ち書きする。書く位置によって四声を表記するために、2文字以上の語彙は連続できない。そこで、清国政府の命を受けた、蔡璋が「中国速記学」として完成する際に「連書法」を採用し、スピードを向上させるために四声の一部の表記法をなくした。それは、2字以上の語彙は最初の符号だけ四声を表示するものであった。^{#11}

ただ、三村はタテ書き方式考案の動機について、洋服のポケットに速記用紙を忍ばせてこっそり書くために工夫したと書いている。

図 2-130 は三村式の基礎符号で、基礎符号を母音符号とそれ以外の音節を単位とする子音符号に大別し、母音は複画派、折衷派の最短線・点を配当し、子音には初音に用いる大文字と二音目以降に使用する小文字を用意した。子音符号で「サ」、「テ」に大文字 1、小文字 2 の 3 符号を配分した。2 符号を設けたのは「オ」、「カ」、「ナ」、「ハ」、「ラ」、「チ」、「ニ」、「リ」、「ス」、「ツ」、「ヌ」、「ル」、「ソ」、「ノ」の 14 符号。その他は 1 符号を割り当てた。

	アイエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト	ナニヌネノ		
三村式 タテ書き仮名速記法 三村侑弘 1963	~イフー [*] #	#	* #	* #	* #		
ハヒフヘホ	マ	ミムメモ	ヤユヨ	ラ	リルレロ	ワ	備考 * 大文字 # 小文字
* #				* #			ル ^ヅ の ^上 の ^線 より ^短 い

図 2-130 三村式タテ書き仮名速記法の基礎符号 三村侑弘 1964

三村式は、離筆、交差、並行の形式で筆記する点が仮名の筆法と似ているが、基礎符号のほか、撥音、濁音、半濁音と長音符、疊音、拗音、数詞といった平均的な符号体系を整えて、また字音語に対応するため「イ」、「ク」、「ツ」、「ル」の尾音を簡単に示す省略法を加えている。略語は 257 個を用意し、「コト」には文字の「」を用いている。

縦書き速記の傳音快字では縦罫線用紙の上に漢字のように右行から左行へ書き進む方向で幾何符号を上から下へ書いた。それに比して、三村式は符号速記の経験をもとに速記理論を組み立てているため、横方向への符号が連続したり、右下方向への速記線のずりが出現して、縦書きと言えない綴りが生じる場合がある。両式の着想は一元的に発展してきた西欧起源の速記文明と、漢字文明の融合が行われた試みであった。

図 2-130 を見ると、三村式では符号の連続で離筆、並行、交差などの表記をしたり、小文

字の使用があつて複雑なため、山根式の 1936 法と同じ方法つまりイロハ文字の一音ずつをずらして次の音を綴る練習方法を採用している。基本的にはすべての音を固定する全記法をとるが、省略しても正しく判読できる言葉では音を書かないことを勧めている。

発話速度を完全にカバーできる最高レベルの衆議院式標準符号（単画）と、仮名式の三村式で同じ文章を書いた文例を図 2-131 に挙げておく。

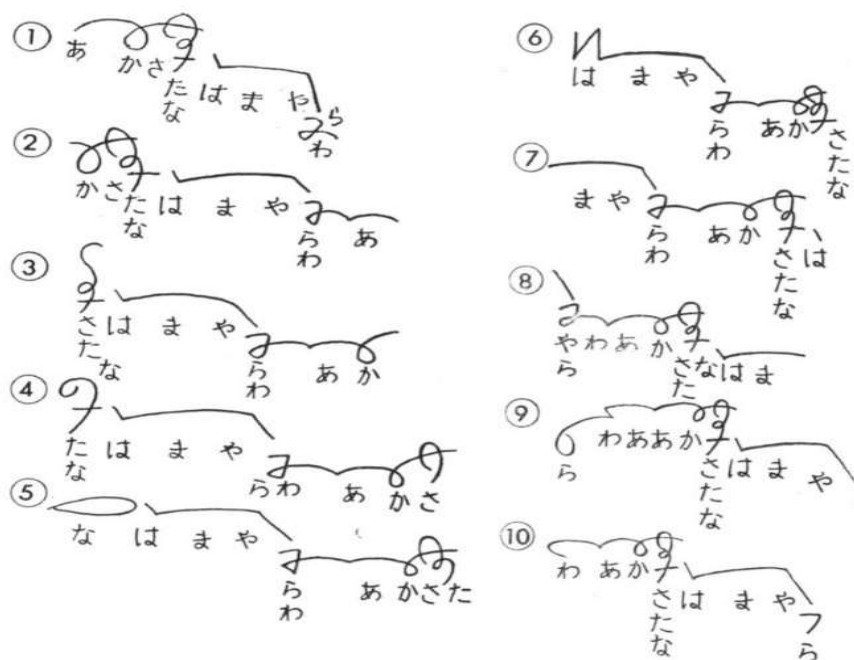


図 2-131 三村式における基礎符号の連続練習課題例

ア列の符号を 1 字ずつずらして大文字と小文字のつながりに慣れる。ほかの列や音節をアランダムにつないでいく。それによって速記符号の筆記を体得することになる。

幾何派、草書派、半草書派の比較に図形の要素を単位として数えることが妥当であるかどうかは疑問であるが、最初の「ロンドンに緯度が 52 度で北カラフトあたりに相当するそうです」の朗読文について、幾何派の画数計算法によると、西来路は 6 ブロック、18 ストロークで書いており、一方、三村侑弘は、6 ブロック 46 ストロークで書いたと数えられる